様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２４年６月７日現在

機関番号：１２６０６
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2010～2011
課題番号：22820024
研究課題名（和文）アイスラーとデッサウ
——亡命期の祖国を主題とした大規模作品をめぐって——
研究課題名（英文）Eisler and Dessau: A Study of the Large-scale Works on the Theme of Homeland Written During Exile
研究代表者
藤嶋　ちはる（FUJISHIMA CHIHARU）
東京芸術大学・音楽学部・助手
研究者番号：70584225

研究成果の概要（和文）：本研究では、亡命期に書かれたハンス・アイスラーとパウル・デッサウのふたつの大規模作品のそれぞれの創作動機および成立過程、作曲技法上の特徴とそれが目指した具体的な効果を検討することによって、これらの作品のもつ歴史的な重要性を指摘するとともに、一般に「反ファシズム」という同じカテゴリーでくくられるこれらの作品の、主題に対する立場の違いを明らかにした。またその受容史をふまえ、これらの作品が持つ現代的な可能性について考察した。

研究成果の概要（英文）：This study clarifies the historic importance of two large-scale works of Hanns Eisler and Paul Dessau written during their period of exile by examining the intent behind and processes involved in the creation of these works; the study also analyzes their composition techniques and the concrete effect they aimed to achieve. Simultaneously, the different standpoints of these works that were generally related to a common theme－antifascism－are highlighted. In addition, we also focus on the practical implications of these works in today’s day and age by examining the history of their reception.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２０１０年度	220,000	66,000	286,000
２０１１年度	540,000	162,000	702,000
年度			
年度			
年度			
総　計	760,000	228,000	988,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：芸術学、芸術学・芸術史・芸術一般
キーワード：音楽学、音楽史、20 世紀ドイツ、芸術・文化政策

１．研究開始当初の背景

(1) これらの作品は一定の知名度を持つものであるが、それにもかかわらず、音楽学的な視点からの研究がこれまであまり多くなかった。また、反ファシズムという大まかな区切り以外にこれらの作品を特徴づける評価がなかった。しかし、この二つの作品は、外見的な共通点とともに、さまざまな相違点もあるのであり、その具体的な検証はこれらの作品の理解にとって不可欠である。

(2) 亡命期に書かれた無調の大規模作品が政治的な内容を持つというのは一般的にはそれほど納得のゆくことではない。なぜなら

このような形態は、上演される可能性という点では不利であり、上演されなければその主張は伝達されえないが、それは作品の存在意義をおびやかしかねないからである。そのため、なぜこれらの作品がこの時期にこのような形をとったのかということは問われなければならない。しかしこの点については、これまでそれほど注目されてはこなかった。

２．研究の目的

(1) これらの作品のそれぞれについて、成立の動機や制作過程を検証し、それらがどのような経緯によってこのような形態をとるに至ったのかを明らかにすると同時に、音楽手法についての分析を行い、その音楽作品としての特徴を明らかにすること。

(2) これらの作品の受容史について検証し、それが歴史上のそれぞれの段階で、どのように評価され、理解されてきたかを確認すること。また併せてこれらの作品の現在における意義を考えること。

３．研究の方法

(1) 作品の成立動機や制作過程に関する研究は、先行研究をふまえたうえで、手稿譜や手紙などの一次資料の検証と、出版された楽譜や資料からたどることのできる作曲家自身の言説を収集・整理することによって行った。楽曲分析については、デッサウの方は最新の出版譜に基づいているが、アイスラーの作品は楽譜が出版されていないため、出版社から演奏用のスコアを借りて使用した。

(2) 受容に関する研究は、先行研究を参照することに加え、新聞や雑誌等の当時の記録や、作曲家自身による回想等も考察の対象とした。その際、アイスラーの場合は既存の CD 等も参考にしたが、デッサウの作品には一般に入手可能な録音資料が存在しないため、ドイツのラジオ・アーカイブより初演の録音を借りて使用した。

(3) 現在における意義を検証する作業の一環として、2011 年 2 月にライプツィヒで初演された舞台化の試みである演奏会を現地で聴いた。これはこの作品にとって、ひとつの新しい可能性の創出ともいえるものであり、その上演に至るまでの情報を収集し、今後の可能性についての考察を行う貴重な機会となった。

４．研究成果

(1) 研究の主な成果

① アイスラーの《ドイツ交響曲》

この作品は 1930 年代半ばに着手され、戦前にそのほとんどの部分が書かれた。この作品が第一に掲げる主張は反戦ではなく、ファシズムによる労働運動の弾圧や思想統制に対する抵抗である。これは基本的に十二音技法を用いて書かれているが、手紙などの資料から、それはこの時期にアイスラーがこの技法に見ていた将来性と深く関係するとともに、現実的には、統一戦線構想に基づいた、前衛作曲家と労働運動との連携を模索するという状況の下で構想されたものであることがわかった。この作品の手法の精緻さと複雑さの根拠は第一にこの点に由来する。

しかし、当時緊急を要していた状況に対応すべく着手されたにもかかわらず、社会的な状況の悪化のためにこの作品の上演の見込みはどんどん失われていく。さらに、戦後もすぐにはこの作品は上演されなかった。そのため、この作品の構成は初演までに幾度も変更され、最終的な形になるまでには長い時間がかかっている。このような中断や修正の多い複雑な成立過程を検証することによって、そこには作曲家の姿勢の変化、ひいてはこの作品の性格の変化を読み取ることができる。

結果的に、この作品の最終的な版では、制作当初は確かに期待されていたはずの直接的なアピールの要素は後退し、代わりに歴史的な出来事に対する熟考を促す静的な姿勢が前面に出された。音楽のこのような態度は、明確な主張を持ち、辛辣に、かつ勢いのある調子でつづられたブレヒトのテクストを、時間の流れとともに異化している。

②デッサウの《ドイツ・ミゼレーレ》

この作品は、終戦を間近に控えた 1940 年代前半に構想されたもので、ここでは戦争が直接主題化されている。この作品はデッサウとブレヒトとの最初の実質的な共同制作であった。音楽分析からは、シェーンベルクの影響を強く受けた作曲家個人の音楽語法と、演劇の理論を背景に持つ、メッセージの伝達を重視するブレヒトの美学との折衝の様子が明らかになる。その意味では、この作品はデッサウのその後の創作活動にむけた転機としての側面をもつものであり、この作品の響きの複雑さや有機的な構造はここでは、デッサウ自身の音楽語法によるところが大きい。

デッサウの作品は戦後のドイツ国民に向けて書かれたもので、大編成のオーケストラは、それが戦後の上演になることをあらかじめ念頭に置いたものであったが、制作者たちが戦後すぐの上演を期待していたにもかかわらず、この作品も初演までには長い時間がかかっている。制作当初、この作品は戦争の「当事者」であったドイツ国民に対する直接

的なアピールを目指していたが、初演が行われた 1966 年には、少なくとも表面的には戦争はすでに過去のものとみなされており、そこでは期待したとおりの効果が得られなかったことはおそらく間違いがない。

そこで、この作品のその後の上演に際してはしばしばその時点における新しい解釈が加えられている。これはこの作品の「直接的なアピール」を目指す姿勢を引き受けるものである。この作品を舞台化したものが 2011 年に初演されたが、それもその一つに数えられる。全体的な構成や音楽はそのままであるが、そこでは「母ドイツ」を演じるセリフのない人物がおかれ、舞台の上では新旧さまざまな解釈が視覚的に表現された。ここではヒトラーが主導した第二次世界大戦のみならず、新しい現実として、アフガニスタンをめぐる問題が取り上げられている。この作品では、未来を自らの手でつかみ取ることをまだ産まれていない子供に諭す母親（第 III 部）はイスラム教徒の姿をしている。それは、ブレヒトもデッサウも知らなかった、この作品がいま新たに直面している現実である。

(2) 研究の独自性とインパクト

本研究では、作品を音楽史の中に位置づけると同時に、現代の視点からそのアクチュアリティのあり方を追求するという二つの目標を同時に掲げた。これは古典的な作曲家作品研究の手法としてはあまり一般的でなはないが、歴史的な出来事と深く結びついた作品が、時代とともに忘れ去られないためには、このような作業が不可欠である。

ただしこれはあくまでも作品研究である。これらの作品は音楽的に優れたものであり、だからこそ、音楽作品として正当に評価され、その歴史の中に正当に位置づけられるべきなのである。しかしその一方で、これらの音楽は明確な主張を持ったテクストを持ち、その内容の伝達が当初から、作品の主要な目的として設定されていた。そのような音楽作品が時代を経た後にどのように受容されてゆくのか、それらにはどのような可能性があるのか、そのような問いに対して、すべての作品に通用する共通の答えは存在しない。それでも、それはこれらの作品と向き合う時に避けては通れない問いである。

以上のことから、本研究では作品そのものの分析や検討とその受容のされ方を二本の柱として、この問いに対する限定的な回答を試みた。ここで明らかにされたことは、すくなくともこれらの作品の、現代における再評価へとつながるものであると考える。

(3) 今後の展望

時代と結びついた作品は、その主題を普遍化し、ひとつのモデルとして提示することで、時代とともに過去のものになることを免れることができる。これはブレヒトが演劇について持っていた理論を音楽へと応用したものであるが、これらの作品の新しい可能性を考えるとき、このような見方は大きな意味を持つように思われる。

具体的で政治的な意図ないし主張を音楽で表現することはもちろん、20 世紀にはじまったわけではない。しかし 20 世紀が、よくも悪くも、音楽のそのような面で発揮しうる力に注目が集まり、多くのことが試みられた時代であることは間違いがない。

このような音楽の中には、それが直接取り上げた歴史的な事象を超えて、ひとつの芸術作品としてすぐれた内容を持ったものが多くある。しかしそれらはその主張をすでに作品の主要な構成要素として持っているのであり、そうである以上、その受容をめぐっては、常に必然的に多くの問題がつきまとうことになる。本研究はそのような問題に対して、具体的な作品に基づいてひとつの見解を示すものであるが、それがこのジャンル全体に対する一定の価値づけにつながるためには、他の作曲家や別の時期の作品についても、同様の分析や判断がなされなければならないだろう。そのような研究の積み重ねが、「政治参加」という大まかなカテゴリーでひとまとめにされがちなこれらの作品を正当に評価し、その時代に即した価値を考え直すことへとつながるのだと考える。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）

①和田ちはる　「時代とともに変わる音楽作品の意味――ハンス・アイスラーの《ドイツ交響曲》のあり方をめぐって――」『東京芸術大学音楽学部紀要』第 37 集（平成 23 年度）、2012、p.201-215、232-233（査読有）
http://www.lib.geidai.ac.jp/MBULL/37Wada.pdf

〔学会発表〕（計３件）

①和田ちはる　「ハンス・アイスラーの《ドイツ交響曲》―― その成立と受容をめぐる一考察 ――」　日本音楽学会第 62 回全国大会、2011 年 11 月 6 日、東京大学

② FUJISHIMA Chiharu, “Paul Dessau’s ‘German Miserere’: A Study of its Actuality” East Asian Regional Association of the International Musicological Society, 2011.9.16,

Seoul National University

③和田ちはる　「『政治的なレクイエム』――P. デッサウと B. ブレヒトの《ドイツ・ミゼレーレ》のアクチュアリティ ――」日本音楽学会第 61 回全国大会、2010 年 11 月 7 日、愛知芸術文化センター

６．研究組織

(1)研究代表者

藤嶋　ちはる（FUJISHIMA CHIHARU）

東京芸術大学・音楽学部・助手

研究者番号：70584225

(2)研究分担者

なし

研究者番号：

(3)連携研究者

なし

研究者番号：